
眠りの丘の忌まれ人

藍川いさな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠りの丘の忌まれ人

【Nコード】

N7395N

【作者名】

藍川いさな

【あらすじ】

死者が眠りにつく墓地。死んだ者の眠りを妨げないよう、管理を担当するのが「墓守^{はかもり}」の仕事である。

「眠りの丘」と呼ばれる広大な墓地があった。その新人墓守として、春日キタはこの片田舎の小さな町にやってきた。

安アパートに住まいを構え、墓守としての生活をスタートたものの、毎晩のように死んだ男の悪夢にうなされ、眠れない毎日が続いていた。

プロローグ

空は曇天。鳥の姿も見えない、凍えた空が頭上に広がっていた。

「……しっかし、寒いなあ」

黒尽くめの格好をした青年は足元にバケツを置くと、寒そうに両手を擦り合わせ息を吐き掛ける。

敷地内の草むしりと墓石磨きが主の掃除が終われば、ひとつひとつの墓石の前に、白い花を一輪ずつ置いていく。

水に浸した切花が入ったバケツは重たく、張られた水は氷水のように冷たくなっていた。

明日もあさつても続く、終わることのない永久運動。これが墓守と呼ばれる青年の主な仕事であった。

「……よし」

あとひとつでおしまいだ。青年は腰を伸ばした。

改めて辺りを見渡す。少し緑が薄くなった芝生の絨毯がゆるやかな起伏のある大地を覆い、その上には白大理石で作られた薄い長方形の墓石が、規則正しく大地の上に連なっていた。

この広大は墓地の下に、無数の人々の亡骸が眠っている。

いつしか人はこの墓地を「眠りの丘」と呼ぶようになっていた。

青年はひとつの墓石の前で立ち止まると、足元にバケツをゆつくりと降ろした。ちゃぶん、と中身の水が音を立てて揺れる。

青年は白い椿の花がついた枝をバケツから取り出し、墓石の前にそつと供える。

「ほら、あなたと同じ名前の花だってさ」

土の下で眠る少女に語り掛ける。

青年は一礼すると、名残惜しい気持ちを抑えながら墓石に背を向けた。

ありがとう。

思わず足を止めた途端、閉門を告げる鐘の音が辺りの空いっぱい
に鳴り響く。

今の声は……。

青年は動揺を抑えながら、ゆっくりと周囲を見渡した。この辺
り一帯には、青年以外誰もいない。

そして、最後にもう一度、少女の墓石に向き直る。

当然、誰かがいるはずもなく、白い大理石の墓石が佇んでいるだ
けだ。

きつと空耳だ。

青年は自分に言い聞かせると、思いを断ち切るように視線を逸ら
した。

ブログ（後書き）

ずっとPCで眠っていた話ですが、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

1話 悪夢

ひとりの男がいる。

痩せた頬、落ち窪んだ眼孔。

まだ歳若いようであるが、張りを失った肌と荒んだ瞳が男を老人のようにも見せていた。

明かりもつけない荒れ果てた部屋の中で、テレビだけが絵空事のようにしらじらしい。

騒がしい笑い声が、時折テレビから湧き上がる。

だが、どんなに愉快的番組であっても、男にとっては何の意味も持たない。

古い型のブラウン管テレビ。

丸い小さなテーブル。

子供向けアニメのシールがべたべたと貼られた整理ダンス。

だが、この部屋には子供の気配などない。

ささくれだつた茶ばんだ畳。

日に焼け崩れかけた砂壁。

白茶けたカーテン。

うず高く積み上げられた雑誌。

空になった弁当の容器。

空き缶が詰め込まれたビニール袋。

突然、男は小さな丸テーブルを掴む。力任せに投げ飛ばし、音を立ててテレビに激突した。

ゴミが辺りに散乱し、さっきまで音を立てていたテレビは沈黙する。

畜生。

男は苛立った様子で、胸ポケットから煙草とライターを取り出し

た。

煙草に火をつけようとするが、手が震えてなかなか着火してくれない。

男は舌打ちをすると、煙草を壁に叩きつける。

転がったウイスキーの瓶を、手元に引き寄せ、震える手で蓋を開け、瓶に直接口をつける。

瓶の口が歯に当たり、がちがちと音を立てる。

口の周りを、胸元を濡らしながら、男は褐色の液体を一気にあおった。

俺の、俺のせいじゃない。

男は何かから怯え逃れるように、酒をあおり続けた。

* * * * *

言い様のない息苦しさを覚え、キタは目を覚ました。
辺りはまだ暗い。どうやらまだ夜は開けていないようだ。

……今、何時だ？

枕元の目覚まし時計に手を伸ばそうと思ったが、面倒になってやめた。毛布に顔を埋め、もう一度眠ろうと目を閉じる。

コチ、コチ、コチ、コチ……………。

時計の秒針の音がいやに大きく、規則正しい無機質な音が暗い室内に響き渡る。

しばらく毛布に包まって眠りが訪れるのを待っていたが、どんどん頭が冴えていくだけのようだ。

「くそ」

ダメだ。キタは諦めて思いきり布団をはね除けた。しかしあまりの寒さにもう一度布団を引き寄せる。

布団から腕だけを出し、手探りで目覚まし時計を探し当てる。

蛍光塗料の塗られた時計の針は、朝の四時を示していた。眠ったのが一時過ぎだったから、三時間も眠っていない。

無意識に舌打ちすると、キタは乱暴に頭を掻き毟る。頭の芯がじんと熱を帯びているようだ。

もつと眠らせると身体が言っている。しかし、この部屋に染み付いた男の記憶が、キタを眠らせてくれない。

この部屋に移り住んでそろそろ半月。キタはひとりの男の夢を見続けている。

最初はただの夢だと思っていたが、同じ男が出てくる夢を三日立て続け見るなんて、さすがにおかしい。そしてようやく、これがただの夢ではないことに気がついた。

男は以前、この部屋の住人だったのだろう。そしてこの部屋で死んだ……のかまではわからない。

ただわかつているのは、男の思念のようなものが、この安アパートの一室にべったりと滲み込んでいるということ。その思念が悪夢の原因だということ。

「畜生……」

なるほど、このアパートの家賃が破格だったわけだ。わかっていたら、こんなところに引越しなどしなかったのに。

不動産屋の店員を恨めしく思う一方、気づかなかった自分に嫌気が差す。

だが引越してしまつた以上、しばらくはここに留まるしかない。現在のキタの所持金は、ほぼゼロに等しかった。

「あーあ、ねみ……」

半分開かない瞼を擦りながら、灯りをつけようと手を伸ばす。照明器具から垂れ下がった紐を引くと、丸い蛍光灯がちかちかと瞬いた。

眩しくて、一瞬目を細める。次第に慣れてきた目で、白々とした灯りの下に浮かび上がる殺風景な部屋をしみじみと眺めた。

中古屋で購入したテーブル。

拾つてきた中古の石油ストーブ。

昨日食べたカップラーメンの食べ残し。

十年以上は使っているラジカセ。

暇つぶしに買った雑誌。

脱ぎ散らかした衣類…… などなど。

さつき夢の中で見たばかりの光景と妙に重なつて、急にやるせない気分になる。

壁の薄い部屋の中は、身体の芯まで凍えるほど冷えきっていた。あまりの寒さに、身体が勝手に身震いしてくるほどだ。

キタは毛布を引っ張り出して肩に羽織ると、ストーブの前に屈み込んだ。

テーブルの上のマッチ箱から、残り少ないマッチ棒を取り出す。箱に勢いよく擦りつけると、灯った小さな火をストーブに移した。

「頼むから早く温まってくれよ……」

すん、と鼻を噉るとストーブに語り掛ける。

改めて毛布を身体に巻き付けて膝を抱える。徐々に赤く染まっ
ていくストーブに手をかざし、凍えた指先を擦り合わせる。

ようやくストーブは熱を発し始め、キタは安堵の息をひとつ吐き
出した。

2話 花屋の少女

「お客さん。そろそろ起きてください」

聞き馴れない少女の声がした。

誰かに肩を揺すられて目を覚ましたものの、頭はまだぼんやりと
していた。眠気まなこを無理矢理開く。

ようやく目を開くと、面識のない少女がキタの目の前にあった。

「大丈夫ですか？」

大きな目だな、という第一印象。

中学生くらいだろうか。少し長めのショートヘア。ふんわりとし
た色素が薄い茶色の髪は、触ったらきつと柔らかいだろう。

「あの……大丈夫ですか？」

少女が、もう一度訊ねる。

のそりと顔を上げると、辺りは濃い緑を帯びた観葉植物に囲まれ
ていた。

ここは……？

眠い目を擦りながら、ぼんやりと辺りを見回した。

入口の近くにあるガラスケースには、薔薇やカサブランカ、カー
ネーション、後は名も知らない華やかな切花が並んでいる。淡い色
の花は、蛍光灯の光を浴びて薄っすら青みを帯びている。

そっだ、ここは。

ようやく、自分が花屋に来ていたのだと思い出す。

キタがいるのは、店の奥に設けられたカフェだった。

高良生花店はカフェも併設している。ここ数年前から、店の主人が趣味で始めたという話だ。小さいながら結構人気がある職場の女性が話していた。

キタが突っ伏していたテーブルには、この店特製ブレンドコーヒーが、一口も手を付けられることなく冷たくなっていった。

そうだ、急な注文が入って、お前が取りに行けと走らされ、商品を注文してから、時間が掛かるからとここに通されて……。

すっかり寝入ってしまったというわけか。

窓に目を向けると、外はもう真っ暗だ。

「くそ」

キタは舌打ちをすると、苛立ったように髪を掻き毟る。

「今、何時？」

投げやりなキタの様子に怯えているのだろう。店員の少女は、びくつと肩を震わせた。

「……………八時、ちょっと過ぎです」

嘘だろう。キタは耳を疑った。

店に来たのは確か四時過ぎ。五時までに商品を持って戻らなければならなかったはずなのに。

「やっちまった……」

何てことだと、キタは頭を抱えて込んだ。

ふと、肩に毛布が掛けられていることに気がついた。無造作に毛布を剥ぎ取ると、少女の目の前に突き付けた。

「これは？」

「……わたしが。寒そうだったので」

すっかり萎縮した少女は、キタの目を見ようともしない。

少女もようやく気づいたのだろう。こんなことをする前に、その前にすべきことを。

「……あのさ、こういうのいらないから」

そのまま毛布を少女に付き返す。

「ごめんなさい。何度か起こしてみたんですけど……」

目を覚まさなかったから、と蚊の鳴くような声が耳に届く。

キタは小さく舌打ちをすると、自分の髪に指を埋め、少女から顔を背けた。

これじゃガキの八つ当たりじゃねーか。

不注意だったのは自分だ。わかっているが、少女に対して苛立ちを感じているのも事実だ。

「お花はうちの者が運んでおきました」

取り敢えず、客からのクレームは避けられたということか。
一応、礼の言葉くらい言っべきだとはわかっている。

「……面倒、掛けて悪かったな」

ダメだ。自分で言うのもなんだが、とても感謝の気持ちは感じられない。

「配達代も請求に入れといて」

キタは用件のみを告げると、椅子から腰を上げた。
コーヒー代をテーブルに置くと、椅子に掛けてあった黒いフード
つきコート、古びた皮製の鞆を掴み取る。

「あの、ごめんなさい。わたし……」

少女の声が追い駆けてきたが、キタは無言のまま、コートも羽織
らず店を飛び出した。

3話 眠りの丘

店からバス停へと、キタは必死に走った。

「やばかったあ……」

走って、走って、どうにか「眠りの丘」行き最終バスに乗り込むことができた。

乗客はキタひとりだけ。さすがにこんな時間帯に墓参りに行く者はいないようだ。

後方の窓際の座席に腰を降ろすと、どっと疲れが押し寄せる。キタは背もたれに身を預けると、ぼんやりと暗い窓ガラスに目を向けた。

窓の向こうには、塗り潰したように黒い景色。外灯もまばらな暗い道を、低い唸りを上げてバスは走る。

住宅街を通り抜け、田畑を越え、線路を渡ると、すでに辺りは人々が生活する空間とは異なっていた。緑の芝以外に何も無い丘陵地を進むと、そこはもう「眠りの丘」である。

数千もの人々が眠る「眠りの丘」は、人種も宗教も宗派も問わない広大な共同墓地。

見渡す限りの緑の絨毯を敷き詰めた、ゆるやかに起伏する大地。地平線の彼方まで続いている地表には、いくつも連なるように並んだ乳白色の墓石。それすら知らなければ、ここが墓地だと知らなければ滅びた都の遺跡のようだという。

また「眠りの丘」の夕暮れ時は大層美しいらしい。しかし名物とも言われる光景は、空気が澄んだ快晴の夕暮れ時だけにしか見れない貴重なものだという話だが、残念ながらキタもこの町に来てから

一度も見えていない。

今日こそ見れるかと思っていたが、花屋で居眠りをしてしまったお陰でまた見過ごしてしまった。

幸い、今夜は目映い月が出ている。もしかしたら月明かりの下の景色というのも味があるかもしれないと窓の外を眺めていたが、いつの間にかまた船を漕いでいた。

* * * * *

「すみません、今戻りました」

事務所のドアを開くと、蛍光灯の光がひどく眩しい。室内は静かで、カタカタとパソコンのキーボードを叩く音だけが聞こえる。

カタカタという音が止んだ。一番奥にある机で作業をしていた女性が立ち上がる。

「遅い」

女性は眼鏡の細いフレームを人差し指で押し上げると、不機嫌そうに腕組みをする。

彼女の名前は加茂下マユコ。

淡いグレーのパンツスーツに、ひつつめ髪と銀縁眼鏡。少々キツイ顔立ちをしているが、十分に美人の部類に入る。地味な格好をしているから三十代くらいに見えてしまうが、実際は二十代であるらしい。

「高良さんから事情は聞きました。あちらが気を利かせてくれたからよかったものの、居眠りだなんて……少したるんでない？」

眼鏡のレンズの奥にあるアーモンド形の目が、きりりとキタを見据える。

「あー……すみません。気をつけます」

へらつとした愛想笑いを浮かべると、マユコの眉間に皺が刻まれる。

「口だけじゃなくて、本当に気をつけて下さい。春日キタクん」

できの悪い弟を叱るような口調で、マユコは念を押す。

「……すみません」

この小姑め。胸のうちで罵りながらも、キタは素直に頭を下げる。

「じゃあ今日はもいいから。お疲れ様でした」

「あ、川本さんは？」

極端に無愛想で寡黙な所長の姿がみえない。

「所長はもう帰られました。今日は定時で上がりたいとおっしゃっていたので」

「はあ」

墓守を管理する事務所には、川本所長と加茂下マユコのたった二人だ。

川本は見たところ四十代前半。ほとんど口も開かず、愛想の欠片もなく、まるで地蔵のようだな男というのが、キタが抱いた印象だ。

「……お先に、失礼します」

「あんまり夜更かしはしないようにね、新人墓守さん」

最後に釘を刺され、キタは事務所のドアを閉ざした。

更衣室で黒尽くめの仕事着から私服に着替え、屋外へ出た途端、吹きすさぶ冷たい風に身を震わせる。

安物の薄手のジャケットを掻き合わせ、背中をまるめて裏門をくぐる。

「お疲れさん」

突然声を掛けられた。

声は門の隣りに設置された、小さな守衛室からだった。初老の男が小さな窓から顔を覗かせていた。

「どうも、お先に」

軽く会釈をすると、男はにこりと笑った。

「気をつけてな」

感じがいい初老の守衛は、少し義父に似ている気がした。

4話 悪夢再び

男の夢は、もう毎晩のように見ているが、今夜は少しばかり様子が違っていた。

子供が、いる。

小さくて、ひどく痩せた子供だった。

怯えた大きな目。

こけた頬。

棒切れのように細い腕と足。

襟首が伸びただらしないトレーナー、くたくたのハーフパンツ。肩まで伸びた髪は、絡んでもつれくしゃくしゃだった。

子供は怯えていた。

部屋の隅で、精一杯身体を小さくして震えている。

突然、子供は何かに対応して身体を大きく震わせた。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

……

この世に存在することを詫げるかのように、子供は謝罪の言葉をくり返す。

ごめんなさい。

胸倉をつかまれても、畳の上に投げ付けられても、子供は同じ言葉をくり返していた。

ごめんなさい。

まるで壊れたおしゃべり人形のように、何度も、何度も。

* * * * *

叫んだ瞬間、キタ目を覚ました。

「う、わ」

飛び起きた瞬間、殺風景な室内が視界に入る。

辺りはすでに明るい。しん、と静まり返った室内には、目覚まし時計が規則正しく時を刻む音だけ。

「……夢だよな」

キタは震える指先を握り締める。

これが夢じゃないと、おぼろげながら理解していた。恐らくすべてこの部屋で起きたでき事なのだろう。

せつかくの休日だというのに、今はまだ朝の六時。頭の奥が痛いのは単なる寝不足だとわかっていたが、またおかしな夢を見るのではないかと思うと二度寝などできる気分ではなかった。

勢いよく布団を跳ねのけ、そのまま流し台に直行した。

蛇口からほとばしる冷たい水で顔を洗い、寝る前に脱ぎ捨てた服に着替える。

「うお……なむ」

薄手のジャケットを素早く身に纏い、キタは逃げ出すようにアパートを後にした。

今日は日曜。週に一度の貴重な休日だ。

せっかくの休日をこんな部屋で過ごすなんて、真つ平ご免だ。気分転換にパッと遊びに行きたいところだが、現在の財布事情を考えると実現は難しい。

金が掛からず、暖かく、適当に時間も潰せて昼寝もできそうなところと言えば図書館しか思い浮かばなかった。

近くに市立図書館があることはリサーチ済みだ。取り立て本が好きというわけでもないが、図書館という施設は結構好きだ。

無料で雑誌が読める、無料でDVDやLDが観れる、無料で音楽が聴ける……とにかく無料というのが一番の魅了だ。

キタは行き掛けのコンビニエンスストアで肉まんふたつと缶コーヒーを買い、図書館へ向かった。

町営だから小さな図書館を想像していたが、思っていたよりもずっと立派なものだった。

レンガを模した外壁には緑の蔦が絡まり、古い洋館のような雰囲気を出している。門から建物の入り口までは、ちよつとした公園のようだ。中央にある丸い花壇には、今は何も植えられていないが、春にでもなれば色とりどりの花で埋め尽くされるのだろう。落葉した大樹の下には小さな木製のベンチが備え付けられ、昼寝をするにはうってつけの場所のようだ。

さいわいベンチは空席だ。ベンチに腰を降ろすと冷めかけた肉ま

んを頬張り、コーヒーで腹の中に流し込む。

何度かその作業を続け、もうすぐ終えようとする頃、何となく視線を感じて顔を上げた。

「あ
」

声を出したのはキタではない。驚いたように立ち止まった少女のものだった。

少しタイトな赤いダッフルコートにデニムのジーンズ。被ったフードから、ふんわりとした柔らかそうな髪が覗いている。

誰だっけ。

「あの、えと……こんにちは」

キタが思い出す前に、少女はぎこちなく挨拶をした。バックを抱えた腕がかすかに震えている。

「……どうも」

堅い返事を返しながら、少女の正体をようやく思い出した。

彼女は墓守御用達の生花店、高良生花店の店員だった。

5話 ミルク

まさかこんな場所で、しかも昨日の今日で遭遇するとは。

店で勝手に居眠りをしておいて、拳句の果てには八つ当たり。正直気まずい。

とはいえ、ここで知らん振りするのも感じが悪い。いや、感じが悪いのは今更始まったことではないのだが。

キタがぐるぐると考えている間に、少女が先に行動を起こした。

「昨日は、ごめんなさい」

少女はキタの前に立つと、勢いよく頭を下げた。

「あの後もお仕事があったんですよね？　なのに余計なこととして…
…本当にごめんなさい」

「……………あ、いや」

確かに昨日は腹を立てていたが、ひと晩経ってようやく冷静になれた。

待っている間に眠ったのは自分だ。起こされなかったなんて、文句をいう筋合いもない。

寒いだろうからと掛けてくれた毛布を突き返すなんて　どれだけ心の余裕がないのだろう。

わかってる。いや、わかっていた。謝るべきはキタの方なのだと。なのにこんな風に謝られたら、どうすればいいのかわからなくなる。

「別に、さ。あんたが謝る必要はないだろ」

キタは頭を掻き篋ると、居心地の悪さに視線を明後日の方へ向けた。

「どちらかというと、俺の方がさ。悪かったよ」

「……そんな」

少女は戸惑いながらも、ぎゅっとバツクを抱き締める。

まさかキタが謝るとは、夢にも思っていなかったのかもしれない。

明後日の方向を睨みながら、少女がこの場を立ち去るのを待っていたが、いつまで経っても立ち去ろうとしない。

「……まだ何かある？」

最後に文句のひとつでも言いたいのだろうか。覚悟を決めると少女の方へと向き直った。

「………ます」

バツクを抱き締めたまま、何かを呟いた。

「え？」

聞こえなかったという仕草を取ると、少女は必死なくらい大声を張り上げた。

「今度は十分くらい経ったら必ず声を掛けます！」

大真面目な顔で何を言うかと思ったら。

キタは小さく吹き出した。

「……あの、どうしました？」

「いや、別に」

莫迦なのか素直なのかわからないが、底抜けにお人好しなのは確かそうだ。

「じゃあ、今度居眠りした時は頼んだ」

「……はい」

キタが笑ったせいだろう。少女もやっと表情をやわらげた。

「あの、墓守さん」

墓守さん。

少し考えて、それが自分のことだと気がつく。

「何？」

これで話は終わりかと思っていたが、少女はまだ何か言いたいことがあるようだ。

「お名前、聞いてもいいですか？」

恐る恐る少女が訊ねる。

「名前？」

少し考えてから「墓守さん。それでいいよ」と答えた。

もったい付けるわけではないが、ただ面倒くさかった。

少女は不満そうではあったが、それ以上は追及しようとしなかった。

「わたし、高良チヅルっていいいます」

「ああ」

だからどうした。

そのまま受けもせずに流そうと思ったが、少女の名字に聞き覚えがある。

「高良ってことは、あの店の？」

「はい、娘です。あと、兄がひとり」

察しがいらしく、キタの中途半端な質問にチヅルはすんなりと答えた。

バイトかと思ったが、家業の手伝いだっただのか。

「最近ですよ、墓守さんが来るようになったのって。いつから「ちらに？」」

いつ引越してきたか、ということだろうか。

「まだ半月」

「わあ、本当に最近なんですわね」

そんなに驚くほどの話でもなかるうに。

「でも、よくこの図書館ご存知ですね。駅から離れてるからわかりにくいでしょう？」

「……まあ、たまたま見つけて」

何度かたわいもないやり取りをくり返しながら、キタはふと疑問を抱く。

どうしてこんなところで、主婦みたいに井戸端会議の真似をしているのだろう。

毒にも薬にもならない話を、何故彼女はこんなにも楽しそうに話しているのだろうか。

チヅルの話はゴミの分別の話から始まり、駅前アイスクリーム屋のサービスデー、昼間は電車の本数が極端に少ないこと、数年前までコンビニエンスストアが朝七時から夜の十一時までしか開いていなかったこと。

次から次へと、当たり前障りのない話題が飛び出してくる。

「あとうちからここに来る途中に、美味しいパン屋さんがあるんですよ。特におすすめののがチョココルネなんです」

まだ話が続きそうなので、チヅルの鼻先に手のひらをかざし、ストップを求め。

「わかった。もう十分だから」

一瞬、きよとんとする。だがすぐにキタが何を言いたいのか悟ったようだ。

「す、すみません……」

調子に乗ってしゃべり過ぎたと自覚はあるようだ。

チヅルは羞恥で耳まで染めると、お喋りを戒めるように口を両手で押さえた。

「……あの、これ」

チヅルは手にしていたバック 生成りのトートバックに手を突っ込むと、小さな茶色い紙袋を取り出した。

「さっき話したチヨココルネです」

お詫びと言ってはなんです、とキタに差し出した。

「いって、別に」

差し出すチヨココルネの袋を拒絶すると、チヅルはますますしょんぼりとした顔になる。

しまった……。

相手は中学生だ。少しは自分が大人にならないと。

「やっぱり貰う」

無造作に紙袋に手を伸ばした。

「え……?」

チヅルは戸惑うような瞳を向ける。

「パン、くれるんだろ？」

ぼんやりしているチヅルの手から紙袋を取り上げると、中からまだ温かいチヨココルネを出した。

チヨコレートクリームがこぼれないように気をつけながらふたつに割る。崩れた方を口の中に放り込みながら、もう半分をチヅルに差し出した。

「はい、あなたの分」

「……ありがとう」

あ、笑った。

面白いくらい、気持ちが素直に顔に出るようだ。この少女は。

だが、どちらかというところを相手にするということよりは、人懐っこい仔犬の相手をしている気分だ。

半分こしたチヨココルネを、嬉しそうに頬張るチヅルを見ながら、キタはそんなことを思う。

色素の薄い、ふんわりとした髪、人懐っこそうな明るい茶色の瞳。きつと両親の愛情を一身に受けて育ってきたのだらうと、容易に想像できる。

こういう目を、キタは知っている。

彼女を見た時、どこかで会ったような、見たような気がしていたが、今、ようやくわかった。

そうだ。うちのミルクに似ているんだ。

子供の頃に飼っていた、白くてむくむくとした雑種の大型犬。よきキタの遊び相手であった愛犬を思い出す。

チヅルの人懐っこそうな大きな目は、ミルクと酷似していた。

散歩用のリードを目の前にちらつかせると、尻尾を干切れそうなほど振ってきたっけ。

そう、その時の嬉しさに満ちた目。人を信じて疑わない無垢な瞳。ついでに、少しふんわりとした細い髪も、ミルクのふわふわとした白い毛を思い出させる。

結論が出た途端、急に笑いが込み上げてくる。

「どうしたんですか？」

少し心配そうにキタの顔を覗き込む。

「別に、ちょっと思い出し笑い」

本当のことを言ったら、さすがにこのお人好しの少女でも怒るだろう。

キタは誤魔化すように笑った。

6話 アパートの噂

「墓守さんって、この辺りに住んでるんですか？」

面識が無い同士だと、ついどちらかが質問攻めになるような会話になってしまう傾向がある。

キタたちも、その例に違わず、質問形式の会話を始めようとしていた。

まず第一問目の問いはこうだ。

「墓守さんって、この辺りに住んでるんですか？」

問いに対する答えは。

「そう」

短い返答だった。だが、これでは会話が成立しないことくらい、キタとて承知している。「ここからもうちちょっと先に行ったとこのアパート」と、付け加える。

「ここって駅から遠いから、ちょっと不便じゃないですか？」

「遅くならなければバスもあるし、今のところは別に」

「ふうん、なんて名前のアパートですか？」

「第五極楽荘」

現在住まいとしているボロアパートの名を告げる。

そのまま会話が続くかと思っただが、ぴたりとそこで止まった。

「第五、極楽荘ですか」

チヅルは硬い表情で、その名前をくり返す。

「……何かあるの？」

「いえ、ただ子供の時、仲が良かった子がそのアパートに住んでいたなって」

子供の頃って……今も子供だろうが。

少し大人びたチヅルの口調が何だかおかしくて、急に笑いが込み上げる。

「それで、仲が良かった子は？」

笑い出しそうになるのを誤魔化すように訊ねる。

「それが……わからなくて」

チヅルは急に困った顔になってしまった。

「転校しちゃったみたいで。小学生低学年くらいだったから、あんまり覚えてなくて」

「ふうん」

子供。ふと夢に出てきた子供の姿を思い出す。

怯えた瞳。痩せこけた手足。

……まさかな。

脳裏に甦った映像を振り払うかのように、がりがり髪をかき回す。

「あの、どつですか？」

恐る恐るチヅルが訊ねた。

「どつって？」

嫌な予感がする。だからあえてしらばっくれてみる。

「やっぱり……何かあるんですか？」

「何かって？」

薄々チヅルが何を問おうとしているのか悟ってしまう。どうにか他の話題にできないものかと思うが、生憎話題を振るのは上手くない。しかも、彼女は「その話」をしたくてうずうずしているようだ。

「ごめんなさい……」。

弱々しい泣き声は、まだ耳に残っている。今朝見たばかりの夢だというせいもあるが、妙にしっかりと覚えているものだから始末が悪い。

「……実は、へんな噂がありました」

チヅルは躊躇いつつも、やはり好奇心には逆らえないのだろう。意を決したように、キタの目を真っ直ぐに見つめる。

「……出るって噂が、男の子の」

幽霊が。

キタは少女の小さな眩きを聞き逃さなかった。思わず唾を飲み込んだ。

「ごめんなさい。」

夢で見た小さな子供。痩せこけた顔に並ぶ双眸がキタを凝視する。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……！」

怯えたか細い声が鮮明に甦る。

「あ、はは」

気が付くと震えている指先を握り込むと、キタは乾いた笑い声を立てる。

「残念ながら、俺にはそういう勘ってまったくないから」

「じゃあ、他の住人の人からそういう話を聞いたりとかは」

なおも食い下がろうとするチヅルに、キタは若干の苛立ちを覚える。

「悪いけど」

チヅルの言葉を遮る。

「実はそういう話、嫌いだから」

自分でも驚くほど、冷ややかな声だった。はっと、チヅルは口を

押さえる。

「ごめんなさい。わたし、へんなこと聞いちゃって……」
「別に」

缶コーヒーを軽く揺すり、まだ僅かに残っていることを確認するとあおるように飲み干した。

「あの、怒ってるんですか？」
「……別に」

本当に怒ってなんかいない。怒っていないし、不機嫌でもないはずなのに、態度だけが反比例してゆくのは何故だろう。

「ホント怒ってないからさ　いい加減消えてくれる？」

つい口から滑り落ちた言葉に、チヅルの肩が強張った。泣き出しそうになるのを堪えるように大きく目を瞞るのを、後ろめたい気持ちで目を背ける。

「じゃあ……わたし、帰りますね」

突然ベンチから立ち上がる。

「……失礼します」

止める間もなくチヅルは走り去った。
チヅルの姿が視界から消えると、キタは疲れたようにベンチに座った。

何やってるんだ、俺は。

キタは乱暴に頭を掻き毟ると、心の中には後悔の嵐が吹き荒れた。アパートの話などしなければ。

……いや、違うか。

ちょっとした噂話と受け流せない自分の余裕のなさが情けない。

チヅルの話で、夢でみた子供が実在したのだと確信を得たことが、思っていたより衝撃であつたらしい。

夢ではないと自覚はしていたつもりであつたが、夢での出来事があの部屋で起こつたのだと改めて他人から突き付けられるのは、ずいぶん違うものだ。

キタは大きなため息をつくとき、何気なく空を仰ぐ。

気持ちのいいくらい晴れた空だ。柔らかな乳白色の青空に、筆で刷けたような淡い雲。嫌味なくらい良い天気だ。

「あーあ」

気分は最悪だ。キタは勢い良くベンチに寝転んだ。途端。

「いて」

ごつ、と頭に硬いものが当たった。

何だろつと頭の下から引き出してみると、チヅルが手にしていたトートバックだった。

生成りの厚地でできたバックには、図書館で借りた本、携帯電話が入っていた。

「忘れてったのか」

さて、どうしようか……。

本だけならまだしも、携帯電話がなかったら困るに違いない。
しかし、迷ったのは一瞬。

「行くか」

キタは勢いをつけて起き上がると、チツルの後を追うために歩き出した。

6話 アパートの噂（後書き）

ずいぶんと久々の更新となってしまいました…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7395n/>

眠りの丘の忌まれ人

2011年9月8日13時51分発行